

## 平成 22 年度インターラボ開催報告

奥田昇（京大大学生態学研究センター）

開催日：平成 22 年 4 月 8 - 12 日

参加者：京都大学理学研究科生物科学専攻大学院生 48 名

生態学研究センター、京都大学理学研究科および霊長類研究所の 3 部局合同で実施するグローバル COE プログラム「生物の多様性と進化研究のための拠点形成 - ゲノムから生態系まで -」も早いもので 4 年目を迎えました。現政権が推進する事業仕分けに一喜一憂しながら臨んだ中間評価でしたが、お陰様で事業費削減の憂き目に遭うことなく新年度を迎えることができました。英語ディベートやフィールドワークとゲノムサイエンスを同時体験できる実習コースなどユニークな教育カリキュラムを実施したことが高い評価につながったようです。

その教育カリキュラムの一環として、大学院修士・博士課程の新生がまず体験するのがこのインターラボとなります。延べ 5 日間かけてグローバル COE の関連施設を巡回し、異分野の最先端研究に触れることを趣旨としています。当センターでは、毎年、調査船「はす」への体験乗船を実施しています（写真 1）。本プログラムにおけるプロジェクト研究の目玉のひとつである「琵琶湖」の野外調査を体験できるとあって、学生の間でも人気の企画となっています。今年も乗船定員 20 名のところに 66 名の参加希望があったため、午前の限られた時間内に 4 班に分かれて乗船するという慌しいスケジュールとなりました。関係者から嬉しい悲鳴も上がりましたが、前日に訪問した瀬戸臨海実験所で夜の懇親を深めすぎた学生たちに多数のドタキャンが出たため、結果として、スペースにゆとりあるクルージングとなったのは不幸中の幸いといったところでしょうか、、、。

さて、琵琶湖体験乗船の中身ですが、例年は琵琶湖北湖盆の玄関口まで出向いて、水平性の広がるダイナミックな景観を堪能するというのが定番コースとなっていました。しかし、今回は 4 回に分乗しての運航計画を立てていたため時間の都合上、対岸の見渡せる狭い南湖を周遊することしかまなりません。琵琶湖を初めて訪れた学生たちの目には、「ちっぽけな湖」と映ったかもしれません。代わりの余





写真2 機材倉庫内の「にわかラボ」でプランクトンを熱心に観察する学生たち。

興というは何ですが、今年はちょっと趣向を変えてみました。船着場の機材倉庫に顕微鏡を持ち込んで「にわかラボ」をこしらえ、自らの手で採集したプランクトンを顕微鏡で観察するというメニューを企画してみました。これが予想以上に好評で、嬉々として顕微鏡を覗き込む学生たちの姿が印象的でした(写真2)。おそらく、プランクトンを観察するのは小学生以来という方も少なくなかったことでしょう。図鑑と全く同じ形をしたプ

ランクトンがレンズ越しに現れた時の感動と喜びは何歳になっても色褪せないものです。また、プランクトンが魅せるあの不思議な姿形を目にすると、進化的背景や生態的意義などといった理屈は抜きにして、自然が創り出す造形美に驚嘆させられることしきり。この時期はちょうど珪藻の増殖期ということもあり、ホシガタケイソウやオビケイソウが数多く観察されました(写真3)。広大な琵琶湖に漂う微小な生き物たちの織りなす「多様性の小宇宙」を実感してくれば、この試みは成功したのも同然です。

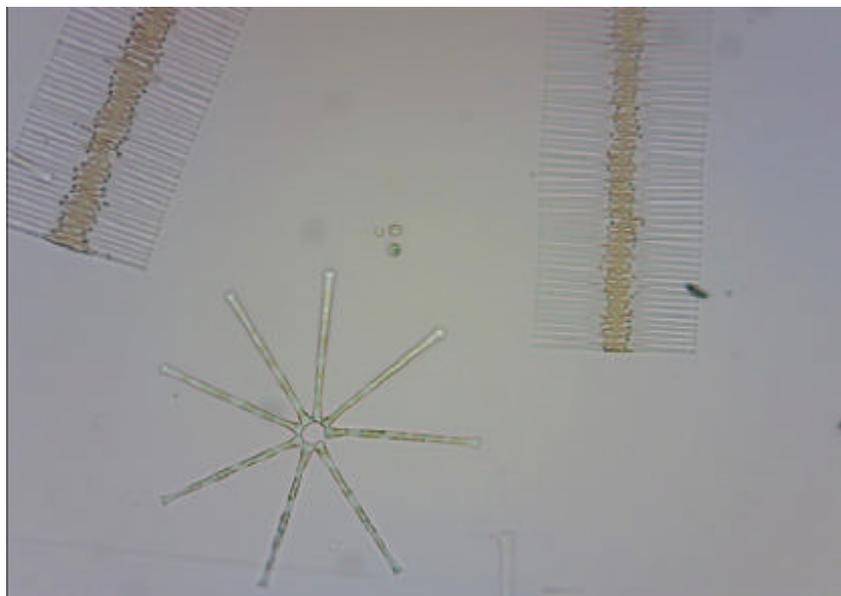


写真3 春の琵琶湖に優占していた珪藻類：ホシガタケイソウ(下端左)とオビケイソウ(上端の2個体)。

午後は、船着場からバスで当センターの研究施設に移動し、事業推進担当者のプロジェクト研究紹介や共同利用施設の見学を行いました。ミクロ生物学を専門とする学生たちにとって、「生態学」は個体を観察する学問というステレオタイプなイメージがあるらしく、群集や生態系を解析する方法論、そして、仮説を検証するための実験的アプローチや数理モデルの考え方はとても新鮮に映ったようです。この中から「ゲノムと生態系をつなぐ」独創的な研究が芽生えるのはそう遠くないことでしょう。

追伸となりますが、本グローバル COE では、昨年度末に大学の大型設備予算で次世代シーケンサー（Roche 454 FLX）を導入しました。また、当センターでも念願（！）の新型安定同位体質量分析計（Delta V Plus）を導入することができました。これにより「ゲノムと生態系をつなぐ」分野横断型のプロジェクト研究にもますます弾みがつくものと期待しています。

最後に、インターラボの運営にご協力いただいた、事務職員、技術職員、ポスドク研究員、RAの方々には心からお礼申し上げます。